

氏名	高橋正樹
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第372号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉木目金ジュエリーによる装飾表現の可能性－KIZUNA 絆 JEWELRY－ 〈作品〉KIZUNA 絆 JEWELRY
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 飯野一朗
（論文第1副査）	東京都現代美術館 企画係長 関昭郎
（作品第1副査）	東京芸術大学 准教授（"） 前田宏智
（副査）	" 教授（"） 原田一敏
（"）	" "（"） 篠原行雄

（論文内容の要旨）

本研究の目的は、日本の伝統工芸技術である木目金における装飾表現の可能性を検証することにより、人と人との関わりにおいて欠くことのできない繋がりを意味する「絆」をコンセプトとするジュエリーを制作することにある。

第一章では、木目金の歴史的背景を跡付け、その起源や独自性を解明し、新しい表現への可能性を探る。

まず木目金の起源について考察する。また、江戸時代の木目金を復元することによって、その制作プロセスを解明し、さらに貴金属を用いた木目金の視覚的な効果について検証する。それらを通して木目金制作工程の技術的な独自性を明らかにし、その新たな可能性を探る。

木目金は、色の異なる金属の板を重ね、接合、彫出、鍛造を繰り返すことによって、模様が作りだされる独特な技術である。この特殊な加工プロセスは単に文様を作り出すだけではなく独自の表現の可能性を秘めている。人は木目金によって作られた作品に触れるとき、単なる表面上の文様の奇抜さだけではなく、そこに記録された時間を超越するエネルギーを感受し、その独自性を認識するのではないだろうか。これらを通して、木目金という技術が文様や加工方法を越え、その行為そのものが新しい表現手段となり得る可能性を導き出す。さらに木目金技術の特徴である金属の緊密性が、現代において人と人を繋ぐ絆としてのジュエリーを成立させる可能性について論じる。

第二章では、絆について論じる。

絆とは何かを考察するために、まず絆という概念を検証する。人が絆を感じ慈しむ理由や、またその感情を喚起するメカニズムを考察することで、絆という意味や価値を導き出し、絆の本質を解明する。

絆とは、完全に繋がっている状態を呼ぶのではなく、繋がっている状態を維持したいという意思やそれを維持しつづけるエネルギーを絆と呼ぶ。人は人とのつながりが曖昧で、脆く、儚いからこそ「絆」を大切に思うのではないだろうか。

本章では人が絆を感じるメカニズムを論じながら、それが造形においても同じ作用を及ぼすことを検証する。本来あるべき部分が失われている造形が人間心理に不安を与えるからこそ、人間は無意識に欠損部分を補完する。そのことによって作者の思案を超えた美的効果を生み出すことが可能になる。

絆とそれを象徴するモノとの関係を精神的な観点から考察することで、絆を表現するジュエリーの存在意義を明確にする。さらに、人とジュエリーとの関わり、その価値の所在を絆という局面から考察す

ることにより、その関係性こそが絆を表現するジュエリーのコンセプトになりうることを論じる。絆を追求し、作り上げる行為そのものが木目金のジュエリー制作のプロセスとなる可能性を導き出し、絆を表現する為のジュエリーを木目金の技術によって作り出す必然性を論じる。

第三章では、実際の制作プロセスを詳述しながら、木目金を用いて絆を表現するジュエリーのコンセプトを述べ、制作意義を明らかにする。

木目金の技術を用いてジュエリーを制作するプロセスそのものが絆の表現となることを検証し、木目金によって絆を表現するジュエリーの本質が、木目金という技術の独自性であることを論じる。さらに人とジュエリーの関わりこそが、絆を作り出す必要不可欠な要素であることを作品の制作プロセスを通して明らかにする。それらによって絆を作り出すためのジュエリー制作が木目金だからこそ成し得る必然性を論じる。

終章として、本研究制作によって生み出された木目金作品から、その独特な制作工程が作り出す価値を明らかにし、また絆の象徴である本研究制作の現代における意味について述べる。最後に、今後の木目金の可能性を導き出し、本論の総括とする。

(博士論文審査結果の要旨)

本申請論文は申請者がこれまで一貫して探求してきた金属工芸の伝統技法である「木目金」を現代表現のなかで、どのように活かしていくかを目的に、歴史的な作例の検証とそれに基づく考察を復元研究制作を通して行い、さらには実際に自身の創作による制作の記録をまとめたものである。

申請者は1999年より継続的に歴史的な作例の復元研究制作を行ってきた。本研究では3点のあらたな復元研究制作を行っている。本論文第一章では、申請者の最初の復元研究制作である江戸前期の「小柄 金銀地木目鍛 銘 正阿弥伝兵衛」(秋田県有形文化財)から、幕末 - 明治前期に作られた「銀、赤銅、銅 鏤木目金地鏝 銘如風堂誠随 (花押)」デンマーク美術工芸博物館蔵までの典型的な基準作6点を通して、木目金技術とその表現の変遷についての考察を行っている。

申請者は6例の研究を比較、対照することで、時代が降るに従って、効率的な作業による文様制作が多くなり、その結果として木目金の初期作品が持っていた魅力が次第に失われ、結果として、木目金が衰退したという考察を導き出す。それぞれの作例について、重ね合わせる素材を分析し、文様を作り出すプロセスを解明しながら、その表現の意図を探っていく実証的な検証には強い説得力がある。

第二章は、木目金を現代表現として実践するアプローチについての研究である。

申請者は、木目金の技術を現代生活において需要の多いジュエリーに応用することを想定する。その際に従来の木目金が煮色着色を施した色金を使っていることから、耐腐食性や耐摩耗性に問題があるため、貴金属素材を組み合わせた現代の木目金を提案する。そのために復元研究を行った六種類のパターンをそれぞれ異なる素材を組み合わせた六種類のカラーサンプルを使って、試みている。こうしたヴァリエーションの制作は素材と表現の相性や表現の可能性を確認するものではあるが、加熱温度や時間の工夫など、伝統的な木目金とは異なった素材を結びつけるための申請者自身の技術的な蓄積の上に成立したものである。

作品としての成果発表には、もともと一体であったものを使用者それぞれが作為を加えることで二つに分かつことを想定して、16例のリングを制作した。このコンセプトと《HINERU (捻る)》、《KIRIHANASU (切り離す)》など、制作過程の動作を作品名に入れていることは、ともに木目金の技術的な特質であり、かつ造形的な魅力である偶然性を取り入れることを意図している。申請者自身、第一章の復元研究から導き出したように、木目金の造形的な訴求力を高めるものとして、技術と時間をかけた制作プロセスを重視するものの、制作過程で生まれたゆがんだ文様などもまた、木目金の「エネルギーの痕跡」としての魅力として位置づけている。

本研究は木目金という、日本彫金の伝統技術のなかでも重要な技法であるにも関わらず、これまで史実やその制作プロセスに対して十分な研究がなされてこなかった分野を、論理的な計画に基づく三つの段階の制作研究を行った先駆的な業績であり、博士（彫金）の学位を授与するにふさわしいものであることを審査員一致で評価した。

本研究をとりわけ重要なものとしているのは、申請者自身による長年の研究成果の蓄積の上に書かれたという点にあり、審査員一同、申請者がこれからも同分野に継続的な関心を持ち続け、いっそうの成果を生み出すことを期待するものである。

（作品審査結果の要旨）

貴金属を素材とした木目金によるジュエリー/リング16点（16組）の提出があり、これを審査した。

木目金は、銀、銅、赤銅、四分一、金などの板を何枚も重ねて拡散接合し、彫りと打ち延べを巧みにくり返してその金属の色の違いにより木目模様を生み出す江戸時代に考案されたとされる技術である。本研究作品は、過去の木目金の復元研究の取り組みからスタートして自分独自の視点、及び感性でその加工プロセスの価値観を探し出し、現代における新しい表現を試みたものである。まずその素材を貴金属に置き換えたことは、拡散接合の試行も大変だったと思うが、シャープな印象でジュエリー作品として完成度の高い結果を引き出した。加工プロセスにおいても、従来の彫りを中心とした木目表現ではなく、拡散接合したブロック状の地金をリングへ加工する工程によって、造形と一体となった新しい木目表現が生み出されている。「NEJIRU①」「HORU」「KIRIHIRAKU」「HIROGERU」「DEAU」「HINERU」「HIPPARU」「MAGERU」「MAKU」「MEGURU」「NEJIRU②」「TUMAMU①」「TUMAMU②」「WARU」「ZURERU」など個々の作品につけられたタイトルはその加工工程を示すものであり、絆というテーマに沿って手法に工夫を加え、結果として造形が導かれると同時に木目による装飾がともなっているものになっている。造形の必然として現われる模様はシンプルな美しさを持ち、変化の面白さや絆を象徴する意思やエネルギーの存在、動きを表面的な加飾では無く内包するものとして新しい装飾表現の可能性を見出した。一つのブロックから導かれた二つのリングのセットとして完成した作品は、発想や造形に加えて、彫金に関する高い技術に裏付けされた魅力あるものとなっている。また、今後の発展、展開も大いに感じる事が出来る。

以上の内容から、高橋正樹の博士課程提出作品は優れた評価に値し、博士の学位を授与するに相応しいと判断するものである。

（総合審査結果の要旨）

本申請は江戸時代中期を起源とする木目金を現代のジュエリー、特にリングに展開するための研究である。そのため時代的考証はもとより、江戸時代の代表的作品6点の復元研究を行い、当時のさまざまな模様の表現、技術等を検証している。この復元研究の記述は今までに行われておらず貴重な資料となっている。江戸時代の作品は金、銀、銅、特に赤銅、四分一と言う日本独特の銅合金で表現されており、表面のごく薄い亜酸化銅の被膜によって複雑な表情を呈している。しかしこのうすい被膜は摩耗により色の形成層が無くなってしまふ欠点がある。そこでジュエリーとして成立するよう、ホワイトゴールド、イエローゴールド、ピンクゴールド、シルバーの貴金属を使用し本研究を推進している。

提出作品は絆をテーマとしたリング16種、計32点である。まず各地金を重ね合わせ拡散接合し、一つのブロックを基としそこから形状の変化を試みている。展示の際には一つのブロックから最終点であるリングまでの行程が詳細に示されておりそれぞれの展開がよく理解出来る。

論文は木目金の独自性、復元研究から始まり銅合金から貴金属に転換した資料、提出作品の具体的な記載となり、一貫した流れとなっている。

本研究により、国際的関心度も高い木目金の成立から貴金属への移行、リングに至るまでの考え方、技術が如実に表現され、この技法を研究する人達の指針と成り得る。以上の事から本申請は博士(彫金)の学位を授与するのに相応しいと認める。